

‘I change, but I cannot die.’

Ali Smith 四季四部作における「ナチスの時代」 / 「Trump の時代」の変身譚

霜鳥 慶邦

1. 「Trump の時代」～「ナチスの時代」

スコットランド出身の現代作家アリ・スミスは、2017年のあるスピーチで、「トランプの時代」を「ナチスの時代」と重ね、両者を「暴力的な分断と境界がますます拡大する時代」と呼ぶ。「ブレグジット文学」の代表的存在として位置付けられる四季四部作は、2016年の国民投票以後のイギリスを舞台としつつ、コラージュの手法によって、前世紀と今世紀のさまざまな事象をテキスト内に断片的に配置する。本発表は、作中にちりばめられた「ナチスの時代」のエピソードを中心に据え、四部作全体を再コラージュ化して読み直すとき、どのような物語が立ち現れるか、検証する。その際に重要になるのが、四部作全体を特徴付けている「変身」のテーマだ。「ナチスの時代」の出来事が、さまざまな姿へと「変身」しながら、「予期せぬ死後の生」(『春』の中のフレーズ)として現代へと繋がる様子を考察する。

2. Daniel Gluck と妹 Hannah

四季四部作で最重要人物となるのが、四部作のすべてに登場するダニエル・グルックと、妹ハンナだ。父親がイギリスで商売を営むドイツ人で、母親がドイツ系ユダヤ人として設定されている。第二次世界大戦中、ダニエルと父は、マン島の敵性外国人収容所ですごす。ハンナはフランスでナチスによって殺される。第二次世界大戦研究の中でも、イギリスの敵性外国人収容所に対する関心は、不十分と言われている。その理由は、敵性外国人収容所の事実は、肯定的イメージに満ちたイギリスの支配的な第二次世界大戦理解となかなか調和しないからだ。スミス文学は、あえて敵性外国人収容所を文学の題材として採用することで、第二次世界大戦をめぐるイギリスの集合的記憶に批判的に介入する。同時に、過去のエピソードを、「トランプの時代」、「ブレグジットの時代」とコラージュ風に並置することで、現代の状況を相対化し問い直すための重要な契機にもなるはずだ。

3. ナチズムの即席性・映画性・日常性

四季四部作と、スミスがあるエッセイで論じるゼーバルトの『アウステルリッツ』では、「ナチスの時代」において、日常の風景がたちまち収容施設に「変身」する現象、逆に収容施設が日常風景に「変身」する現象、さらにはその即席の舞台が映画のセットになる現象が前景化される。興味深いのは、スミスが、ナチズムの日常性・即席性・映画性とのシームレスな関係を、実際の出来事を素材にして巧みに現代に蘇らせる点だ。1つ目は、2015年、フランスのニュースで、「ナチスの時代」の映画の撮影が行われ、ナチズムの回帰と誤解した人々が動揺・混乱した出来事。2つ目は、2020年、パリのモンマルトル地区に、「ナチスの時代」の映画のセットが作られたが、新型コロナウイルスのパンデミックによるロックダウンのため、映画撮影が中断し、この地区がナチス占領下のような状態で放置されたという出来事。さらに、2017年のホロコースト記念日に、トランプが、信仰と民族に基づいてアメリカへの入国を規制する意志を表明したという出来事は、ナチズムの回帰がもはや映画のセットには収まらないことを暗示している。四部作では、現代のイギリスのあちこちに鉤十字の落書きが存在しており、メディアはナチスのテーマに満ちており、現代の日常風景そのものが、ナチズムの舞台と化している。このような状況を踏まえると、先ほどの2つの映画のセットの例は、日常風景に突如現れた非日常的な光景と言うよりも、すでにナチズムの舞台と化した日常風景を異化して映し出すための装置と言えるだろう。

4. Charles Chaplin

映画に関連して、四部作すべてに登場する重要人物が、チャップリンだ。チャップリンは、ダニエルとハンナをはじめ、「ナチスの時代」の人々に笑いと希望を与える存在として登場する。そして重要なのは、ダニエル自身が、戦後、チャップリンに「変身」する点だ。ダニエルは、チャップリンと化すことで、「ナチスの時代」の記憶を保持しつつ、それを希望へと反転させながら生き続ける。チャップリンは、現代の入管収容施設にも現れる。施設に収容された者たちは、チャップリン映画を見て、言語・宗教・民族を超えて大いに笑う。四部作は、「ナチスの時代」だけでなく、ブレグジットによって人々が分断した現代にチャップリンを蘇らせ

ることで、あらゆる分断を超えた普遍的価値を探求しようとする。そして興味深いのは、チャップリンとシェイクスピアが一体化し、アインシュタインへと「変身」という現象だ。過去・現在・未来という概念は幻想にすぎないと唱えるアインシュタインは、コラージュによってあらゆるものを相対化するアリ・スミスの文学技法と非常に相性のよい存在となる。アインシュタインの重要性については、第7章であらためて論じる。

5. Hannah の「予期せぬ死後の生」：女性を中心とする社会運動の歴史

ダニエルの妹ハンナは、第二次世界大戦中に、ナチスによって殺される。ハンナ自身の人生は短く終わるが、四部作を時系列順に並べ直すことで、ナチズムという圧倒的な権力に勇敢に立ち向かうハンナの精神が、さまざまな形へと「変身」しながら、その後の時代に「死後の生」として存在し続ける様子を確認できる。それは具体的には、20世紀から現代にいたる女性を中心とする社会運動として展開する。四部作は、例えばグリーンナム・コモン基地女性平和キャンプ運動（1981-2000年）、世界中の女性たちによるトランプ大統領に対する抗議デモ（2017年）をテキストに取り入れ、巨大な権力に対するハンナの孤独な抵抗の精神が、グローバルな規模の女性の連帯へと「変身」しながら拡大していく様子を描く。そしてハンナのもう1つの重要な「変身」した姿が、ハンナと同名のハンナ・アーレントだ。『夏』が「赦し」についてのアーレントの言葉を「ブレグジットの時代」に蘇らせるとき、我々はそこに、ハンナの精神が「変身」しながら宿っていることを理解することになる。

6. ブレグジット、COVID-19、ダンケルク

『夏』は、パンデミックの状況下で、イギリス政府が医療従事者に対してゴミ同然の扱いをしていること、ブレグジットに執着して近隣諸国からの支援を受けられないこと、さらに、ダンケルク精神を叫びながら実際には国民を見捨てている様子を描く。スミスは、第二次世界大戦神話の中核を成すダンケルク精神のアンビヴァレンスと偽善性を指摘しようとする。この特徴をより深く理解するために注目したいのが、『冬』に登場するイーノック・パウエルだ。悪名高い1968年の「血の川」演説にまつわる一連の出来事と言説を検証することで、戦後のイギリスにおいて、ダンケルクの記憶が、愛国的包摂性と人種主義的排他性の二面性をもつ様子が明らかになる。四部作は、ダンケルクの記憶の排他性が「変身」しながら「コロナの時代」にも生き続ける様子を巧みに描き出している。そして四部作のコラージュの手法は、ダンケルクからの英国兵の撤退と、地中海を渡ろうとして命を落とす難民、さらには難民救助船を妨害しようとする一部の者たちの姿の間に、予期せぬ隣接関係を生み出し、ダンケルク精神と、難民に対するヨーロッパ諸国の姿勢を批判的に見つめ直す契機を提供する点も指摘しておきたい。

7. ロックダウン、入管収容施設、敵性外国人収容所：孤立と繋がり

四季四部作では、「ナチスの時代」、「ブレグジットの時代」、「コロナの時代」に、分断と孤立の状況に置かれた者たちが、主に手紙やインターネットによって必死に繋がりを築こうとする。『夏』は、この孤立と繋がりテーマを、アインシュタインの言葉を引用して、宇宙規模のスケールで描き出す。アインシュタインのメッセージは、アーレントが『全体主義の起源』で論じる人間の「孤立＝見捨てられた状態」の議論と接続して理解することが可能であり重要であることを指摘したい。そして、四部作を締めくくる、繋がりテーマのシンボルとなるのが、アマツバメだ。このアマツバメのシンボリズムを分析することで、この鳥に、「ナチスの時代」のさまざまな記憶（ホロコースト、灰、難民など）が重層的に圧縮されている様子が明らかになる。

四季四部作は、分断と孤立が深まる今の時代を「ナチスの時代」と重ね合わせると同時に、その時代を生きた‘outcast’的存在の知と精神を現代に蘇らせ、最終的にそのすべてを一羽の渡り鳥へと「変身」させる。読者の意識を過去へと多方向に開き、閉塞的な現在の向こう側へと導くこの濃密な象徴性を帯びた渡り鳥が、四季四部作が提供する小さな「希望」と言えるだろう。